

ミシェル・ヴォヴェル「系の歴史学かケーススタディか——心性史における真のジレンマか偽りのジレンマか」

Michel Vovelle, “Serial History or Case Studies: a Real or False Dilemma in the History of Mentalities?”, Eamon O’Flaherty (trans.), *Ideologies and Mentalities*, The University of Chicago Press, 1990, pp. 232-245.

紹介

数量的研究（系の歴史学）を批判する形で 1970 年代以降に復活してきたケーススタディの隆盛に対して、心性史における数量的研究の第一人者として知られる著者が応答した論考。数量的研究とケーススタディのメリットとデメリットを指摘しつつ、両者の視点がともに必要であり両立可能であることを認めている。

○〔導入部〕¹

- ・この 10 年間〔1985 年の時点から見て〕、著者たちは系の歴史学と心性史を同一視することに慣れきってしまった。このことは著者たちが携わってきた歴史学の分析方法から生じたものである。大西洋の向こう側から見ると、系の歴史学と心性史の結びつき²は魅力的で洗練された「フランス型」歴史学の不可分な二つの側面を構成してきた。
- ・近年、これとは逆向きのプロセスが生じている。イタリアや英語圏において、個人の再発見やケーススタディに基づく質的アプローチの復活が生じ、〔系の歴史学に対する〕疑いがフランスにも広がっているのである。
- ・これは、ある流行から別の流行への振り子の揺れに過ぎないのだろうか。それとも今日のもっとも開かれた研究領域の一つを真に深めていることを意味するのだろうか。

○〔1960 年代の心性史〕

- ・都市と農村を研究対象にしていた社会史家たちが数量化の方法とその利点を発見し、経済史の学派に自らを結び付けていた 1960 年代に、社会史の陰で自らのアイデンティティを模索していた心性史が、沈黙の世界を調査するこの方法〔量的方法〕に魅了されたのは当然のことだった。
- ・ここでいう「沈黙の世界」とは、どのような種類のものであれ、個人の伝記というものを十分に残していない人びとの世界を意味する。私たちの祖先の大多数はこの世界の

¹ 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

² 〔経済史や歴史人口学で使われていた統計的な手法を利用して、集合心性を研究しようとする試みのことである〕。

住人であり、その匿名の痕跡を探し出し形にしなければならない。

- ・ロベール・マンドルーの『18世紀の民衆文化』³は、トロワの青本叢書の小冊子の研究に基づいて、この行商の文学を購入した集団の文化的な目録を提示した。この研究は著者にとって重要な参考文献であり続けている。
- ・マンドルーが民衆本の分野で研究したことを、他の研究者はアンシアン・レジーム期のフランスにおける出版の記録で分析し始めた。アルフォンス・デュプロン、続いてフランソワ・フュレのもとで、いわゆるエリート文学と呼ばれるものがそのカテゴリーに応じて分析され、『書物と社会』というタイトルのもとに集められたさまざまな研究の中でエリート文学のカテゴリーの盛衰が図式化された。この盛衰は、出版の特認や黙許⁴を統計にかけることで研究された。
- ・また、特定の書籍商の目録や、もっと広く集められた目録を通して、受容の観点から研究した歴史家たちもいた。ダニエル・ロッシュらの研究以来、この新しい研究分野はそれにふさわしい次元を持つようになった。
- ・こうして数量化のプロセスは、書籍に基づいた、思想の領域における文化へのアプローチから始まり、〔集合〕態度や集合表象の分野へと進んでいった。しかし、1960年代には互いのつながりをあまり意識することなく、他の多くの新しい分野が切り開かれた。社会史や集合態度、集合意識の歴史と結びついて、革命的群集の分析のような、逸脱行為や犯罪に対する伝統的な社会的アプローチの発展が見られた。これは、沈黙の世界を突破するもう一つの手段であった。
- ・新たな史料の発見という点では、著者は死に対する考え方の研究に不可欠な史料として遺言を「再発見」した。このことによって、著者は自分なりの仕方で、ある世代の社会史家たちを巻きこんだ集団的な運動に参加したのだと自覚している。この運動は、彼らが自分たちの方法、関心、統計的アプローチのいずれをも放棄することなく、心性の研究に取り組むように導いたのである。
- ・現在、系の歴史学が征服しようとしているのはイコノグラフィの分野であると思われる。系の歴史学の実践の広まりは、今では真のヘゲモニーの観を呈している。ピエール・ショーニュの言葉を借りれば、「第三次元の系の研究」⁵は今や勝利を収めたのだろうか。

³ 〔二宮宏之・長谷川輝夫訳『民衆本の世界 ― 17・18世紀フランスの民衆文化』人文書院、1988年〕。

⁴ 〔発禁にはなっていないものの、非公式である出版許可のこと。〕

⁵ 〔心性史の分野に適用された数量的研究のこと。第一次元が経済、第二次元が社会、第三次元が文化に相当する〕。

○〔系の歴史学に対する批判〕

- ・第三次元の系の研究が広く行われていることから判断するとそう思いがちになる。
- ・多くの人にとって、系の研究、つまり数量的方法の柔軟な形態を受け入れるということは、真の歴史とは匿名の大衆の歴史であり、それはある時代の通常や平均的な真実を研究することだという考え方を、最終的に認めることなのである。そうした通常や平均的な真実は、偉大な人物の行動にではなく、大多数の人びとの間で繰り返される身振り、イメージ、言説の断片の中にある普及した普通のものの中に見出すことができる。
- ・系の心性史は、それが生み出した成果の量や信頼性、提示する問いの重要性によって受け入れられてきた。しかし、それと同時に当初から批判を投げかけられていたのである。
- ・カルロ・ギンズブルグが定式化し、その後ロジェ・シャルティエが取り上げた批判はもっともラディカルで、系の歴史学の妥当性そのものに疑問を投げかけている。
- ・そうした批判によれば、系の方法は研究対象の読解が貧弱で、一般化されているというだけでなく、極めて歪んだイメージを生み出しているというのである。
- ・次のようなことはある程度認めざるを得ない。つまり、系のアプローチは移動平均(average mobility)の勝利により、偶然の変化だけでなく突然の変化をも消し去ってしまい、緊張や対立がどれほど明らかであったとしても、その重要性を最小化してしまう傾向があることである。
- ・ギンズブルグの考えでは、系のアプローチは、突然の変化を消し去ることで対立を覆い隠して差異を消し去る手段であり、それはすべてを包含する現実であると考えられている集合心性という神秘的な統一へと研究対象を導くことになる。
- ・著者によれば、これは概して不当な批判である。18 世紀の遺言に表れた集合的態度をプロヴァンサ的なバロックというコンテクストの中で研究していたときの著者の研究視点は、このようなものではなかった。差異を理解し、さまざまな社会的行動のコントラストを示そうと努めていた。
- ・ギンズブルグとシャルティエにとって、本の出版や生産の分析に取り組む文化的アプローチは、系の史料の問題点を示す良い例である。このような史料はそれらが媒介している文化モデルの規範化や普及を強調している。しかし彼らの考えでは、現実をありのままに把握するためには、このアプローチを〔文化モデルの〕生産や創造のメカニズムの分析に置き換える必要がある。このような研究は、例外的であってもより直接的なケーススタディや個人の告白に基づいてのみ行うことができるのである。あまりに一般的なだけでなく、潜在的に神秘的でもあるようなグローバルでマクロな視点から、ミクロな視点への移行が求められているのである。
- ・このような批判は、近年の歴史学の新しい傾向の全体というより広いコンテクストの中に位置づけることができると思われる。この視点の変化を、歴史学における伝記研究の増大に表れているような、質的アプローチの復活というコンテクストに位置づけたい。

○〔ケーススタディのメリット〕

- ・問題の核心にあるのは、頑迷な沈黙〔沈黙の世界〕に対する歴史家たちの新たな問いかけである。その一つの段階が歴史への系のアプローチであった。より高度な真実性(authenticity)の要求、そして究極的には文化を「生で」(in the fresh)理解したいという願望が、さまざまな仕方で表現されてきた。
- ・近年、オーラルヒストリーの出現と同時に「ライフストーリー」が流行したことは、偶然ではないと思われる。オーラルヒストリーでは、伝記と同じように「真実は口から出る」という暗黙の前提がある。これはある種の真実であるが、この新しい歴史学の実践に携わる研究者たちは、言説や、言説に含まれうる捏造や複製から一定の距離を保っており、決して騙されたりしない。
- ・こうした要因に加えて他の傾向も、生活の中から引き出された個人の経験の再発見がなぜ重要な参照点であるのかを説明している。ある研究は、プロソポグラフィに長らく関心を寄せてきたイギリスの歴史学の一部門のような深く根をおろした伝統にまでさかのぼる。またある研究は、抑圧的な裁判、証拠、自白などの記録を扱う新しいアプローチの発展から生まれた。そうした記録には、たとえ強要されたものだとしても、還元的に読んでしまっては説明できないような個人の経験の表現が含まれているのである。
- ・カルロ・ギンズブルグがヴェネチアの異端審問の記録に基づいて『チーズとうじ虫』⁶で語ったフリウリの粉挽屋メノッキオの経験は、この種のアプローチの代表例である。ナタリー・ゼーモン・デイヴィスが語ったマルタン・ゲールの物語⁷の主人公たちもまた、この種のアプローチの代表例に挙げられる。もちろん、ミシェル・フーコーの『私、ピエール・リヴィエールは・・・』⁸のように、優れた告白というのは無理やり引き出されたものではなく叫ばれたものである。このもっとも還元不可能な人生の物語は、叫びによって表現され、虐殺によって終わる。
- ・テープレコーダーを使うことができないために、歴史家はアーカイブを操って、直接的な証拠と同等でないにしても、少なくともそれに代わるものを得なければならない。個人や家の日記はそれにもっとも近い史料であり、こうした記録への関心が復活している。ダニエル・ロッシュが手がけたガラス職人メネトラの生涯に関する研究⁹は、史料の豊富さとそれに伴う分析によって、この種の研究がもたらす可能性を示す模範的な例である。

⁶ 〔杉山光信訳『チーズとうじ虫——16世紀の粉挽屋の世界像』みすず書房、2012年〕。

⁷ 〔成瀬駒男訳『帰ってきたマルタン・ゲール』平凡社、1993年〕。

⁸ 〔岸田秀・久米博訳『ピエール・リヴィエールの犯罪——狂気と理性』河出書房新社、1975年〕。

⁹ 〔喜安朗訳『わが人生の記——十八世紀ガラス職人の自伝』白水社、2006年〕。

- ・研究対象が沈黙している場合には他の手段で補うことができる。著者はエクスの大工ヨゼフ・セックに耳を傾けようとした¹⁰。セックは日記を書いたのではなく、心のイメージを図像の形で表現したジャコバン的、フリーメイソンのようなモニュメントを作成した。この無名の主人公が、キリスト教と啓蒙主義、さらには革命の諸要素を結び付けたイメージの中に彼自身の真実を宣言した思想的な作品を著者が見つけ出したとき、彼は今まで統計を通して脱キリスト教化の諸段階を見てきたプロヴァンスの人びとの内的経験を理解し始めたと感じたのである。
- ・時代の流行をいくぶん歪んだ形で反映するフランスの出版界は、長い間、カルロ・ギンズブルグの『夜の合戦』¹¹や『チーズとうじ虫』の粉挽屋メノッキオの存在すら忘れていた。ほんの数年前までは、これらの奇妙な物語が真面目な歴史学の周縁にあると思われていたのである。さらに驚かせられるのは、現在行われている議論の活発さである。メノッキオは今ではすっかりおなじみの主人公になった。

○ケーススタディがもたらした新たな問い

- ・かつて系のアプローチの勝利によってもたらされたのと同じように、ケーススタディの成功とそれが喚起する熱狂によっても私たちは新たな問いに直面している。ケーススタディにおいて私たちは何を研究しているのだろうか。
- ・ケーススタディは逸話のレベルに、つまり、古いタイプの偉人伝の民衆版になってしまう危険がある。歴史学において全く意味のない逸話のレベルなど存在しないと言われるかもしれない。しかし、ナタリー・ゼーモン・デイヴィスがマルタン・ゲールを位置づけたコンテクストをすべてはぎ取ったとき、マルタン・ゲールの重婚と詐欺の物語は、同時代の人びとも経験したように、珍奇な出来事にとどまっていはいないだろうか。もちろん、珍奇な出来事は存在するし、すべての歴史が厳密に典型的というわけではない。
- ・私たちは奇妙なジレンマに直面しているのである。ケーススタディは私たちをより一般的なモデルへと導くのか (E・J・レオナールはプロテスタント信仰の純粋な状態の例として驚くべき遺言を取り上げたが、著者はプロテスタントとカトリック両方の文書にそうした遺言の例が多くあるのを見つけた。このような滑稽な状況に私たちは陥るのか)、さもないと、フーコーのピエール・リヴィエールのように、還元不可能な反抗を提示して、叫び声として終わってしまうのか。
- ・では、歴史学はどうなるのだろうか。このジレンマに応えるにあたって、著者が特に意識しているのは、『チーズとうじ虫』の序文で、「正規なる例外」(eccezione normale)の重要性を強調したギンズブルグの主張である。少しも逸話的ではないこの例外的な領域

¹⁰ [Michel Vovelle, *L'irrésistible ascension de Joseph Sec, bourgeois d'Aix, suivi de quelques clefs pour la lecture des "Naïfs"*, Edisud, 1975] .

¹¹ [上村忠男訳『夜の合戦 — 16-17 世紀の魔術と農耕信仰』みすず書房、1986 年]。

においてこそ、一筋の真実を発見することができるのである。

- ・もし著者が友好的にギンズブルグに文句を言うとしたら、彼はすべての面で勝ちたがっているように見える点である。ギンズブルグは自分の発見のユニークな価値を強調する一方で、他にもたくさんの粉挽屋がおり、メノッキはたくさんいるのだと言う。しかし、私たちがこの無名の主人公の物語に、それ自体においてもそれを越えたところでも興味を抱くのは、極限的な証言としてなのである。
- ・*The Irresistible Rise of Joseph Sec* の補論として、著者は「ナイーフの解釈のためのいくつかの鍵」(“Some keys for the interpretation of *naifs*”)と題する論考を入れた。ナイーフは心の叫びのように規範を越えるからこそ、隠れた場所を照らし出し、そうでなければわからない現実の一端を明らかにする。このような証拠が替えのきかないものであるのは、単に見えない環境に見えるようにするからではなく、隠された瞬間を明らかにしてくれるからである。私たちは、動かざる個人の人生の一見平穏な物語(*chronicle*)である自伝のまさに中心に、突然の変化を見出すのである。
- ・ギンズブルグの明快な解釈は、自伝が動かざる歴史という大きな総体(*consensus*)を個別に反映するものであるとするいくぶん怠惰な見方を、自伝に含まれる亀裂や対立を発見することで改めている。
- ・著者の考えでは、ケーススタディとは、望遠鏡の反対側を通して歴史を見る方法ではないし、何も起こっていないように見える諸個人の歴史の確認でもない。メノッキオは、その悲劇的な頑固さにおいて、リュシアン・フェーブルのラブレーよりも、16 世紀の不信仰の問題に対するはるかに優れたガイドとなっている。ダニエル・ロッシュの研究の主人公メネトラは、著者がもっとも厳格な系のアプローチを使って分析したマルセイユのサン・キュロットの集団的経験を内側から理解するのに役立った。同様に、ヨゼフ・セックは、18 世紀末の都市ブルジョワジーの脱キリスト教化がどのように「内側から」生きられたかを理解するのに役立った。

○結論

- ・結論を述べるにあたり、この二つのアプローチの両方を退けたり、もしくは平和的に共存するための不可侵条約を提案したりして、妥協で終わらせるつもりはない。私たちは、心性の社会史の分野で何が期待できるのかを、系の研究とケーススタディの両方から明示する必要がある。
- ・著者が不可欠であると信じる系の研究は、数量化の魔法によって現実の全体を把握できると信じる統計の幻想に陥ってはならない。もし、系の歴史学が無分別に実行されれば、それ自体が神秘的でミスリーディングになってしまう危険を冒すことになる。それを有効な分析の道具にすることができるかは歴史家次第である。
- ・系は文化的対象を分析する唯一の手段ではないが、遺言、奉納画、装飾壁画などを扱う

場合に、系は文化モデルの妥協、選択、拒絶、文化変容の下向きのプロセス、さらにそれらに対する応答や、そこから明らかになるカウンターモデルが観察可能な重要な場において機能する。この限りにおいて、心性に関する系の歴史学は、階級の壁を超越した集合心性という神秘的な概念と宿命的に結びついているわけではないのである。

- ・逆に、ケーススタディが「口から直接出る真実」であるという万能薬になりうると信じることは、アイデンティティの探求という幻想に陥ることになる。しかし、今のところケーススタディ、ライフストーリー、オーラルヒストリーを研究する広い見識を持った歴史家たちは、誰もこの幻想に屈する危険はない。
- ・この二つのアプローチは、系の研究によってのみ得られるグローバルな理解と、ケーススタディによって可能となる深い探求との間に弁証法的な交換があることを無視する還元主義の視点から見るのでなければ、対立するものではないように思われる。著者は、段階的に心性史の目標を実現させてきたプロセスが実りあるものであることを確信している。また、その道はまだ始まりに過ぎず、次のステップの一つは、これまでの研究が「民衆的な」ゲッターに限定されてきたところから脱け出すことであると信じている。
- ・このような仕方、「エリート」文化の表現を再発見するとしたらどうだろう。もっとも高いレベルの文学的、美学的証拠を理解することを含めて、エリート文化のすべてを理解するというのであれば、それは非常に大きな野心である。
- ・ここでもまた、私たちは心性の歴史家の特徴である旺盛な探求心(appetite)に直面することになる。少なくとも著者は、心性の歴史家たちがその貪欲さにおいてさえも、この学問を立ち上げた勇敢な発見者たち（著者にとってのモデルはロベール・マンドルー）のあらゆる資質を示してくれることを期待している。